

# 総合的な学習の時間の充実に向けた 研究体制づくりについての一考察 —若手教員へのサポートと先進校の取組を通して—

和歌山市立有功東小学校  
教諭 福井規之

## 【要旨】

総合的な学習の時間の充実に向けた研究体制づくりについて、若手教員の授業研究及び授業実践へのサポートを通して、単元作りの視点となるポイントを見出すことができ、児童の探究的な学習を深めることができた。また、先進校の取組調査を通して、先進校では単元についての情報を可視化したシートを用い、若手教員と先輩教員が協同で授業づくりに関わる機会が確保され、授業研究を充実させていることが分かった。

これら2つの取組から、若手教員と先輩教員が協同して授業研究に取り組むことは、両者の学びを活性化していることが分かってきた。若手教員は、先輩教員の経験を継承する機会を得ることができ、先輩教員は、若手教員に自らの経験を伝えようとするすることで、自身の経験をふり返り、整理する機会を得ているからである。個々の教員の立場に合わせた学びが生まれることが、学校全体で学び続ける研究体制づくりにつながるといえる。

## 【キーワード】

小学校 総合的な学習の時間 探究的な学習 若手教員の力量形成 ミドルリーダー

## 1 研究の目的

### (1) 総合的な学習の時間における「探究的な学習」とは

平成20年の学習指導要領改訂では、総合的な学習の時間が学習指導要領総則から取り出され、新たに第5章として位置付けられた。そこでは、総合的な学習の時間は探究的な学習としての充実を目指しており、体験活動だけで終わることや知識・技能を一方向的に教え込むだけの学習活動ではないことが明確にされた。また、小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編(※1)では、探究的な学習における児童の学習の姿のイメージ(図1)が示され、探究的な学習とは、「課題の設定」、「情報の収集」、「整理・分析」、「まとめ・表現」の4つの探究のプロセスの中で行われる問題解決的な活動が、発展的に繰り返されていく一連の学習過程のことであることが明記された。

このように、探究的な学習を行うことが目標に位置付けられ、指導資料等も出版されているが、各教員は具体的に探究的な学習を実践する上では、難しさを感じている。

### (2) 問題の所在

筆者は平成25、26年度の2年間、所属校において研究主任を務め、総合的な学習の時間の研究推進に関わった。平成26年度末に実施した現職教育では、学習材をもとにした単元のねらいや子どもの活動を十分に想定できていなかったり、子どもの活動をどのような順序で展開していけばよいのかを整理できていなかったりするなど、教職経験の浅い若手教員を中心に、約半数の教員が授業研究に課題を持っていることが分かった。しかしながら、

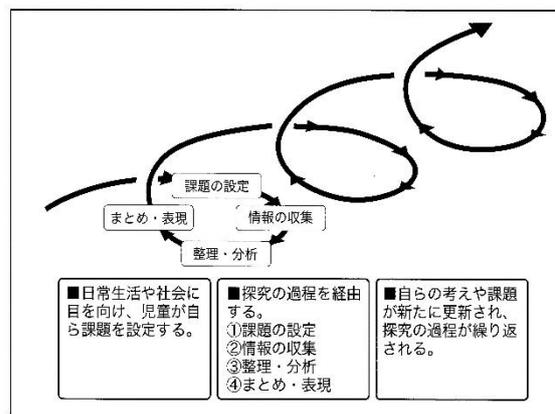


図1 探究的な学習における児童の学習の姿のイメージ

筆者も若手教員も、それらの課題がどのような場面で生まれ、どのように解消していけばよいのか、実態をつかみきれていなかった。若手教員のみならず、ほとんどの教員は、子どもの頃に探究的な学習をした経験が少ない。そのため、具体的な授業をイメージすることが難しく、筆者が研究主任として若手教員に関わったとき、実践してきた探究的な学習の授業イメージを言語化し伝えることの難しさを感じていた。このままでは、所属校でこれまで積み上げられてきた研究実践や授業づくりの経験などが、先輩教員から若手教員に十分に継承されないおそれがある。

### （３）筆者の取組をふり返って

所属校では、平成 17 年度から生活科・総合的な学習の時間についての研究に取り組んでいる。筆者は平成 20 年度から 7 年間、所属校で実践を積み重ねてきた。筆者が赴任した頃は、各学年に 1 人は単元づくりや授業展開についてアドバイスできる先輩教員がいた。生活科や総合的な学習の時間の実践経験が少ない教員も、日頃から先輩教員と一緒に教材研究を行ったり、学習材を探しに地域へ出かけたりすることができた。また、日々の何気ない雑談の中からも教材研究について多くのヒントを得ることができた。

生活科や総合的な学習の時間の授業実践に悩み、自信を持たずにいる若手教員は、このような関わりを通し、授業についての方向性を見つけることができていた。日常的に先輩教員との関わりを持っていた頃は、学校全体で力量を高め合うことができていたとふり返る。

しかし、毎年の変動や退職等で、教員が入れ替わり、年齢構成も変化する中で、所属校では、以前のように教材研究や学習材探しのために若手教員に関わることができる先輩教員が少なくなっている。以前はごく自然に日常の中で行われていた若手教員へのサポートの機会も少なくなり、若手教員は、生活科や総合的な学習の時間の研究を思うように進めることができていないと思われる。

筆者は、所属校に赴任後、先進校への視察を積極的に行ってきた。どの先進校でも、教員同士が子どもの変容や授業展開について活発な議論を行う場面に出会った。議論する教員の姿からは、子どもたちを育てていくために協力し、よりよい授業を目指そうとする思いの強さを感じた。若手教員は先輩教員を手本にし、先輩教員も若手教員と関わりながら学び続けようとする姿が印象的であった。

視察した先進校においても、所属校と同じように若手教員が増えており、それぞれの学校の状況に応じた研究体制を作り対応しているように感じた。

そこで、所属校がこれまで積み上げてきた研究実践や経験を継承し、若手教員の力量を高めていく研究体制を作っていくために、次の 2 点に取り組むこととした。

- ・若手教員へのサポートを通して、どのようにすれば実践や経験などを伝えることができるか調査し、実践を行う上での悩みや疑問を解消する手だてを探る。
- ・総合的な学習の時間の先進校から、若手教員の増加に対応した研究体制の内容を調査し、所属校の研究体制を整えていく手だてを探る。

## 2 研究の内容

### （１）所属校における若手教員へのサポート

9 月から 11 月を中心に、3 人の協力教員（注 1）による授業研究に関わった。筆者は、協力教員とともに単元づくりや授業展開の検討を行い、その後、協力教員が授業実践を行った。授業の参観や考察、協力教員とのやりとりを通して、筆者が行ったサポート、授業実践の中でうまくいかなかった場面、お互いの考えのズレなどの事例を収集し、総合的な学習の時間の授業づくりのポイントについて考察した。協力教員による実践の概略は、以下の通りである。

ア A 教員の取組（第 4 学年「千手川マスターになろう！」）

当初、A 教員は、和歌山城で天守閣への登城サポートをしている忍者を取り上げ、福祉

の内容に迫る学習を考えていた。筆者は、子どもたちの学習の観察から、生き物が好きな子どもが多い実態を踏まえ、生き物とかかわるテーマを設定してはどうか、また、子どもたちが総合的な学習の時間で取り組むテーマについて考える場を持ったらどうかとアドバイスした。

そこで、A 教員は国語科「よりよい話し合いをしよう」の学習で、「総合の学習で何をしたいか」を議題に話し合いを行い、子どもたちみんなで決めた「地域の川、千手川マスターになろう！」をテーマに設定することとした。

単元スタート後、校区を流れる千手川を4回訪れ、水生生物を捕まえて観察するなどの活動を存分に行った。千手川は校区内にあるため何度でも訪れることができ、休日には保護者と一緒に訪れる子どもも現れ、子どもと学習材である千手川との距離は縮まっていった。その中で、子どもたちは水生生物に対する知識を身に付けていくとともに、生き物への愛着も持ち始めた。子どもたちは、1・2年生に生き物の大切さを伝えることを計画したり、生き物について分からないことを教えてもらおうと、専門家の方に連絡をとり、学校へ来てもらうアポイントをとったりしていた。

単元を通して、A 教員は、筆者と一緒に子どもの行動や発言に注目して学習材を探ったことにより、「子どもの興味・関心」をもとにして学習材を設定する大切さを感じることができたと考える。また、子どもたちに身近な千手川を学習材に設定したことで、何度も訪れ、大好きな生き物について十分に調査し、千手川の魅力を1・2年生に伝えるPR活動にまで展開できたと考える。

イ B 教員の取組(第5学年「和歌山の魅力再発見!～オリジナルジンジャーエール～」)

B 教員は、和歌山の魅力を再発見する学習を考えていた。その中で、和歌山県での生産量は全国的に見て多いものの、県民にはあまり認知されていない生姜を使った「ジンジャーエール」を学習材に設定した。筆者からは、子どもたちがジンジャーエールの原料となる生姜を育てる体験や味わう体験をしたり、和歌山産の生姜にこだわりを持っている人と関わる活動をしたりすることなどをアドバイスした。

子どもたちは独自のジンジャーエール作りに取り組み、おいしいものを作るために試行錯誤を繰り返した。その中で、B 教員は、和歌山産の生姜にこだわるカフェを営む店主と子どもたちを出会わせた。子どもたちは、店主からジンジャーエールの作り方を教えてもらうだけでなく、店主が生姜によって健康を回復した経験や、和歌山産生姜の良さを多くの人に知ってもらいたい、生姜料理を多くの人に味わってもらいたいという思いに触れることができた。子どもたちは店主の思いに共感し、一緒に和歌山産生姜の良さをアピールするため「市高デパート」(注2)に出店し、ジンジャーエールの販売を行った。

子どもたちは、保護者や教員、他の学級の児童に試飲してもらい、幅広い年代の方々に飲んでもらえるジンジャーエールを目指して製造を繰り返したり、和歌山産生姜の良さをアピールするためのチラシやポスター制作に取り組んだり、準備から販売まで、それぞれが役割を分担して意欲的に活動することができたと、B 教員はふり返っていた。

ウ C 教員の取組(第6学年「世界でひとつだけの映画をつくろう!」)

子どもたちは、映画制作を通して、地域の良さを伝えたり演技や撮影の専門家と関わったりする活動を行った。2学期に、C 教員は、演技の指導をしていただいた劇団(注3)の方が演劇にかける思いを子どもたちに語る場を設定した。これがきっかけとなり、子どもたちは映画制作の目的や映画に込める思いを見直し、互いの役割について意見を出し合い、全員で一つのものを作り上げる意義を強く意識して活動するようになっていった。

この取組の中で、まず教員自身が劇団の魅力を実感するため、筆者はC 教員とともに、劇団の稽古場に出掛けて練習を見たり、話を伺ったりした。C 教員自身、劇団の方と何度も関わり、生き方や思いに触れ、人と人の関わり大切さや地域の良さなどを感じ、映画を通して視聴者に伝えたいことを明確にしながら活動に取り組むきっかけをつかんだと話していた。

## (2) 先進校の取組調査

### ア 横浜市立大岡小学校の取組

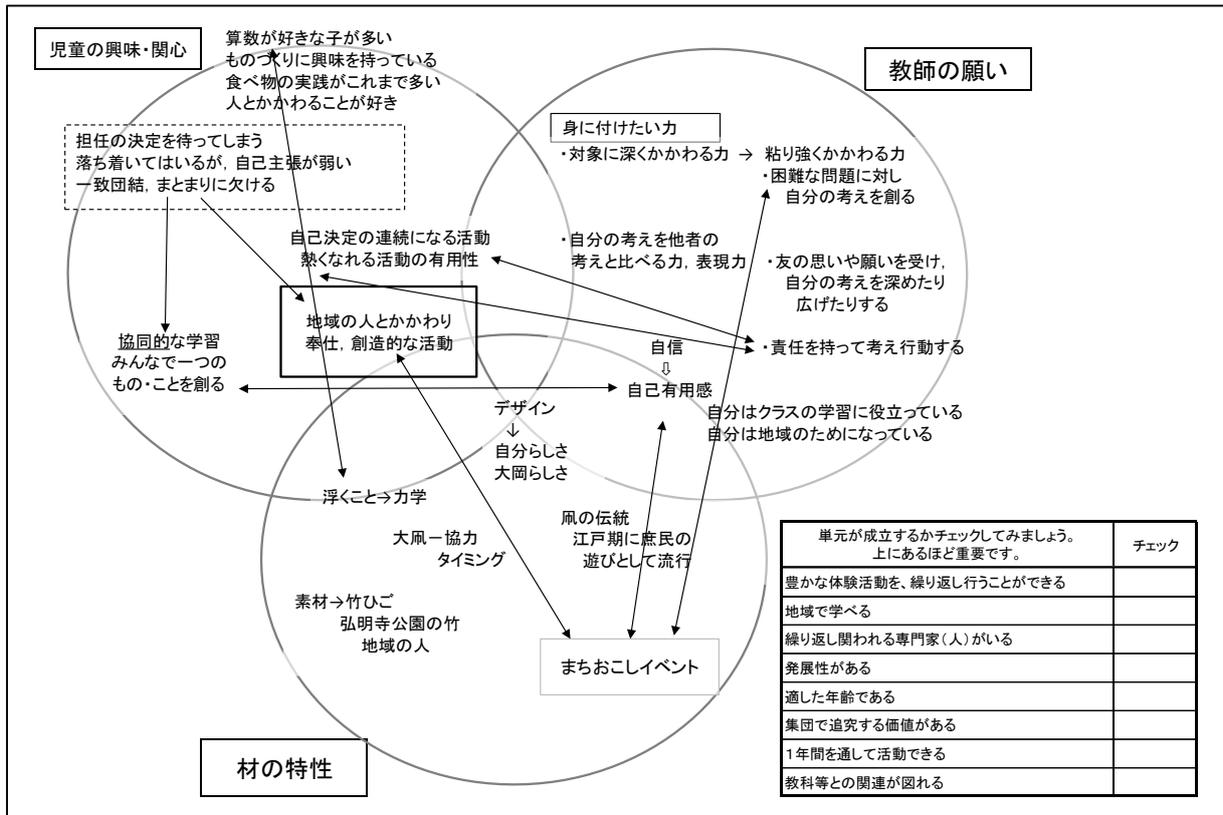


図2 単元開発シート① (注4)

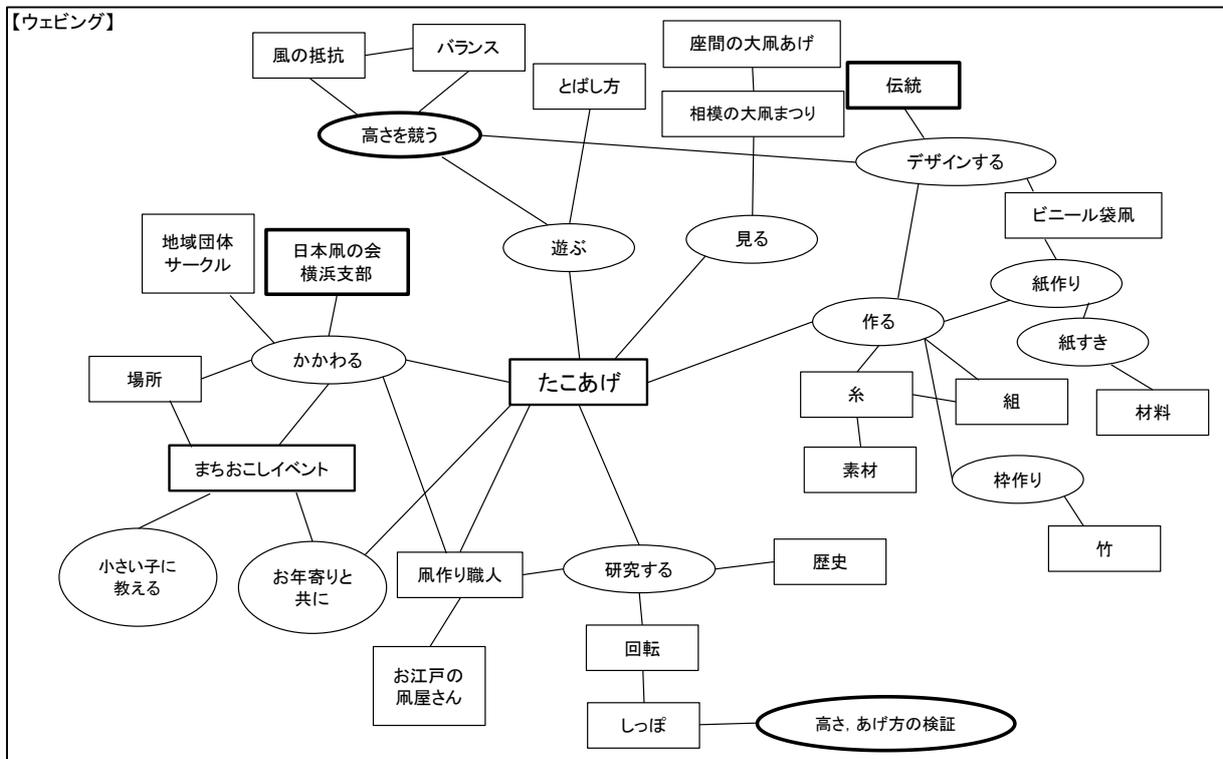


図3 単元開発シート② (注4)

大岡小学校では、子ども主体の学習を目指し、各担任が考えた「材」(注5)をもとにした、学級ごとの総合的な学習の時間の単元づくりに取り組んでいる。単元づくりに取り組む際、教員は先のページで示した「単元開発シート」(図2, 図3)を使い、「材」のアイデアや児童の実態、教師の願いなど、単元づくりの土台となる情報を集め、整理・分析する作業を行っている。このシートを用いることで、教員自身が4つの探究のプロセスに沿った活動を体験し、そのプロセスを意識した単元づくりに取り組んでいた。具体的な授業をイメージすることが難しい探究的な学習を進めていく上で、この取組は重要なヒントになる。

#### イ 京都市立御所南小学校の取組

御所南小学校では、京都ならではの学習材を用いて、その魅力をどの児童も体験できるように各学年でテーマを決めて取り組んでいる。また、学習過程に4つの探究のプロセスを位置付け、単元の学習に必要な要素を入れた学年ごとの「単元構想表」(図4)を構築している。どの教員も、この「単元構想表」をもとにした授業を行うことで、児童に同じ力を身に付けさせたり発揮させたりすることができ、教職経験の浅い若手教員も実践に取り組みやすいという良さがある。

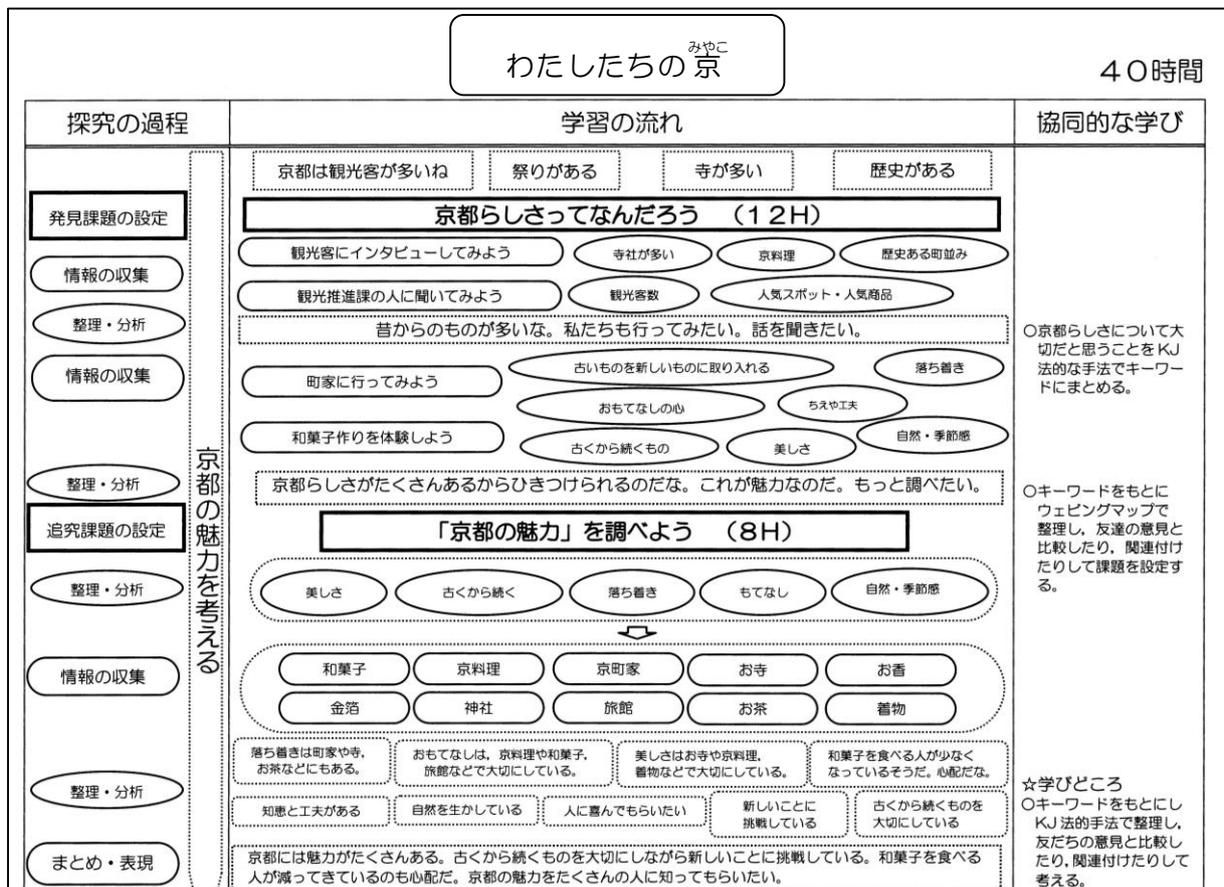


図4 単元構想表(※2)

#### ウ 先進校の取組から見えた共通点

大岡小学校では、学級ごとに学習材を設定し、総合的な学習の時間に取り組んでいるが、「材」や単元の展開の検討に「単元開発シート」を活用して学年・ブロック単位の教員が集まり考える場を設けている。御所南小学校では、学年で1つの「単元構想表」を作成し、それをもとに授業に取り組んでいることから、同じ学年の教員が授業の展開や進捗状況を話し合う機会が生まれている。

調査した両校とも、「単元開発シート」や「単元構想表」を介し、複数の教員が総合的な学習の時間の授業研究に協同して取り組み、その中で若手教員が先輩教員と密に関わる場

が生まれていた。所属校でもそのような場を設定することができれば、授業についての具体的な悩みや疑問を出し合い、解決する機会が生まれると考える。

### 3 成果と課題

#### (1) 総合的な学習の時間の授業を考えるポイントの設定

所属校において3人の協力教員による授業研究に関わり、若手教員に対して行ったサポートの内容から、総合的な学習の時間の授業を考えるポイントが見えてきた。

今回、筆者が3人の若手教員に寄り添いながら研究を進め、授業についての協議を重ねる過程で見えてきたポイントを、相互に関連付けるとともに、それぞれのポイントのチェック項目について、図5に示した。このチェック項目は、今後の所属校での単元づくりだけでなく、学年ごとにテーマを統一して総合的な学習の時間に取り組んでいる学校においても、単元を見直し、検討を加える際の手がかりとして有効であるとする。

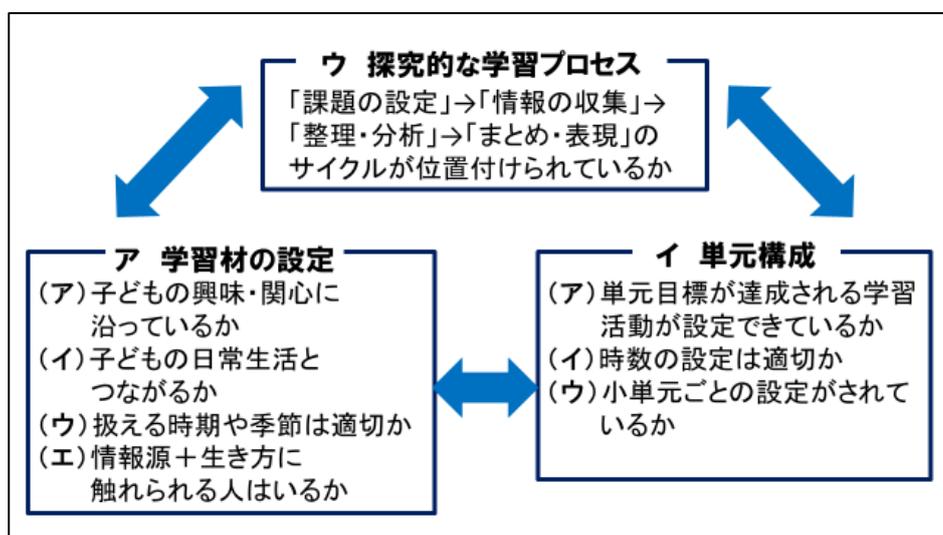


図5 3人の協力教員との関わりから見た、総合的な学習の時間の授業を考えるポイント

#### ア 学習材の設定について

##### (ア) 子どもの興味・関心に沿った学習材を設定する

学習材に対する興味・関心が薄いと子どもたちの意欲が続かない。子どもの学習意欲を持続させるために、興味・関心を探り、それに沿った学習材を設定することが不可欠である。そのため、A 教員の取組のように、教員が想定していた学習材を変更することも必要である。

##### (イ) 子どもの日常生活とつながる学習材を探す

学習材が子どもの日常生活の中にあり、かつ行動できる範囲にあれば、子どもたち一人一人が学習材に直接触れて五感で感じ、見方や感じ方を広げる可能性が高まる。A 教員の取組でも、子どもたちが地域の川に何度も行って活動し、意欲を持続させながら、川に対する見方や感じ方を広げることができた。

##### (ウ) 学習材が扱える時期や季節を考える

学習材として取り上げる農作物の栽培時期や、イベントの開催時期などを十分に考慮することが必要である。例えば、B 教員が取り組んだ「ジンジャーエール」を学習材とした場合、原料の生姜の生長過程に触れ、農家の方の苦労や工夫を感じることで、ジンジャーエールを作り販売したいという気持ちがより高められたと考える。

##### (エ) 情報源としてだけでなく、生き方に触れられるような人を探す

総合的な学習の時間は、子どもたちが将来、決まった答えのない世の中をどのように生き、物事を考えるかを学ぶ場でもあると考える。人と関わることが、課題解決の

ための情報を得る機会としてだけでなく、その人の生き方や社会に対する思い、願いに触れることができる機会として設定することが大切である。C 教員の取組では、仕事以外の生きがいとしての演劇の意義などに触れることを通して、子どもたちに、自身の将来の生き方を考えるきっかけを与えることになったと考える。

#### イ 単元構成について

(ア) 学習内容に迫る活動を設定する

設定した単元目標を達成するために、「地域」や「自然」、「福祉」、「キャリア」などの学習内容に迫る活動の時間を十分に確保することが大切である。

(イ) 学習活動ごとの時数のバランスを考える

学習内容に迫るための活動の時間を確保することは大切であるが、体験活動や調べ活動に偏らないよう、授業時数全体の中でのバランスを考えることも必要であると考える。

(ウ) 学期ごとや学習活動ごとの小単元を設定する

小単元ごとに目標を設定することにより、単元の見通しを持って、児童に育てたい資質・能力をより明確に設定したり、次の学習に向けて、活動や目標の修正もしやすくなったりすると考える。

#### ウ 探究的な学習プロセスについて

探究的な学習の4つのプロセスを学習活動に位置付けられているか、確認することが重要である。しかし、単にプロセスを授業に位置付けるだけでは、活動が形骸化するおそれがある。先に示したア、イのポイントを考慮しながら4つのプロセスを位置付けた学習活動を設定することで、子どもの意欲を持続させ、活動ごとのつながりを意識した、探究的な学習の展開につながると考える。

### **(2) 先輩教員の役割について**

課題として、2つの先進校のように、経験を重ねた教員が先輩として若手教員に積極的に関わり、授業研究を活性化していくことが必要であると考える。

研究を通して見えてきた授業を考えるポイントは、若手教員が総合的な学習の時間の実践に取り組む際の効果的な視点になる。しかし、これまで筆者自身この視点を十分に意識できていなかったため、若手教員に伝えることができていなかった。今後の課題として、筆者を含めた先輩教員が、このポイントを伝えていくことが必要である。また、先輩教員は若手教員へ積極的に関わる機会を増やし、授業について具体的な悩みや疑問を気軽に話せる良き先輩・後輩の関係を築いていくことも大切である。このような関係の中で、授業研究は効果的に進んでいく。そうすれば、個人の力量アップだけでなく、学校組織の一員として、学校全体の教員の力量アップを図っていくことができると考える。

### **4 おわりに**

本研究を通して得られた成果と課題を踏まえ、若手教員と先輩教員が関わりながら進める総合的な学習の時間の研究体制づくりに取り組んでいきたい。

そのための手だてとして、まず、若手教員が授業に対する悩みや疑問を先輩教員と共有できる機会を作る。例えば、本研究から見えた授業を考えるポイントをもとにしながら単元を構想し、大岡小学校が「単元開発シート」用いて取り組んでいるようにそれを可視化する。若手教員がシートに書いた内容を先輩教員と共有し、それをもとに語り合い、授業についての新たな考えを見出す。若手教員と先輩教員が協同してシートの内容を膨らませ検討していくことが、よりよい単元づくりにつながると考える。

次に、経験豊富な先輩教員が減少している所属校の現状を踏まえ、教員を退職したり指導主事を務めたりしている OB・OG を中心に、現職教育に継続して関わってもらえる機会

を持つ。このような機会を設定することで、所属校で育まれてきたこれまでの実践経験を継承したり、授業研究の活性化を図ったりすることができると思う。

〈注釈〉

注1 A 教員：第4学年担任，B 教員：第5学年担任，C 教員：第6学年担任

注2 和歌山市立和歌山高校が，昭和52年度から商業教育における生徒の体験的な学習の場として開催している。学科改編した現在も，キャリア教育という側面から実際の体験を通して勤労意識を高め，正しい職業観，勤労観を育成する場として，開催を続けている。

注3 劇団 ZERO：平成元年に結成され，和歌山市を中心に活動する劇団。平成20年に和歌山市文化奨励賞を受賞。

注4 横浜市立大岡小学校が作成した「単元開発シート」をもとに，筆者が作成。

注5 横浜市立大岡小学校では，単元を通して関わるメインの対象のことを指す。「材」は転がっていて，児童が「材」とのかかわりを深める中で「学習材」になっていくとしている。

〈引用文献〉

※1 文部科学省(2008)『小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』東洋館出版社 pp.12～13

※2 全国小学校生活科・総合的な学習教育研究協議会，近畿地区小学校生活科・総合的な学習教育研究協議会(2013)『第22回全国小学校生活科・総合的な学習教育研究協議会，第16回近畿地区小学校生活科・総合的な学習教育研究協議会 京都大会指導案集』pp.46

〈参考文献〉

- ・榎本龍也(2013)「初任者教員の力量形成についての研究」和歌山県教育センター学びの丘『平成24年度 研究紀要』 pp.23～33
- ・清野祐介(2014)「ミドルリーダー育成に向けた10年経験者研修の実施プログラム在り方についての一考察」和歌山県教育センター学びの丘『平成25年度 研究紀要』 pp.12～21
- ・田村学(2015)『授業を磨く』東洋館出版社
- ・中央教育審議会(1996)「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について(第一次答申)」
- ・中野真志・太町智(2013)『探究的・協同的な学びをつくるー生活科・総合的学習の理論と実践ー』三恵社
- ・中原淳(2012)『経営学習論 人材形成を科学する』東京大学出版会
- ・奈須正裕(1999)『総合学習を指導できる“教師の力量”』明治図書
- ・福田洋子・白井良枝・西村靖子(2015)「総合的な学習の時間における探究的な学習の指導と評価の在り方(二年次)ー小学校，中学校における「単元改善シート」の活用を通してー」広島県立教育センター『研究紀要 第42号』
- ・藤原和博(2015)『たった一度の人生を変える勉強をしよう』朝日新聞出版
- ・文部科学省(2008)『小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』東洋館出版社
- ・文部科学省(2010)『今，求められる力を高める総合的な学習の時間の展開(小学校編)』教育出版